「木陰の物語」

を

家族の構造理論で詳説する

❷

団士郎

家族療法に限ったことではないが、客観性を持った科学でありたい気持ちを払拭できず、厳密さへのこだわりに引っ張られていく事柄は多い。昨今の何でも「エビデンス」、とにかく効果なんて動きはそう見える。そして結局のところ行き着くのは「脳」や「神経」で、心理学やこころの話なんてどうでもよいという結末になる。

家族療法も初期に魅了されたところから、だんだん細分化されていっているように、私には見えてきていた。大雑把だからこそ、後に続く者にとって自由度の高そうなところが魅力だったのだが、そのような発展、展開への関心は思ったほどには生まれなかった。進化していったのかもしれないが、新鮮さに驚いた頃の「家族療法」のことが今も一番のままだ。

私にとってはS. ミニューチンの構造的家族療法が特にそうだった。同時期に、J. ヘイリーや、P. ワッツラウイック、他にも当時の第一世代家族療法家の話を直接聞いたが、やはり構造派の学びが一番面白く、私の立ち位置にも近く、自在に展開していけるように感じられた。

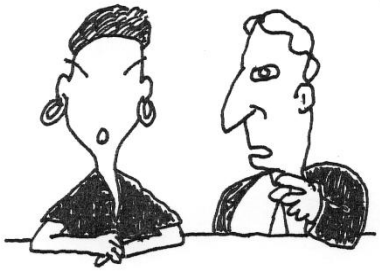
私の家族療法の先生であった G.D.シメオンさんが、ミニューチン氏から日本での家族療法訓練法として、「健康家族面接」のプランを直伝されたことも大きかった。その結果、初期に学んだ私達はケースだけではなく、症状は抱えていない日本の平均的健康家族との面接(訓練)を多数経験させてもらうことになった。

「普通の家族」という言い方は嫌がる人もいるが、日本社会で営まれる平凡な家族の特徴を体得的に学ぶ機会を得た。そんな背景もあって、私の家族療法はS. ミニューチンが構造理論と称していたモノを、一般的な日本の家族に重ねたものになった。

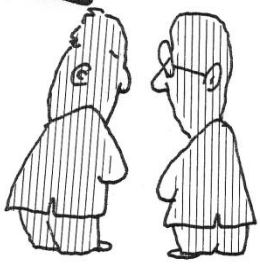
並行して時代の知見、新たな視点は当然のように目にしていたが、コロコロ様変わりするのではなく、構造理論の中で蓄積し、発展的に続いた。その主な理由は、従来型の相談より来談者の役に立っていると思えたからで、これが絶対的に大きかった。

←

つぎつぎと家庭や親子関係を舞台にした事件が世間を賑わす。
そして解説に評論家や学者がかりだされる。テレビの前の見物人でいられる者は、興味深いショーとして眺めていれば良いのかもしれない



しかし、ひとたび当事者家族になった経験のある人なら、必ずこう言うに違いない
「じゃぁ、どうすればよかったのですか？」
「それをなぜ教えてくれなかったのですか？」



なぜこんな事件が起きたのかについて、したり顔で騒ぎ立てるのは虚しい。それが再発防止に寄与することは少ないからだ。むしろ類似事件の続発に、手を貸しているのではないかと思うことさえある

二十一年の児童相談の仕事は、楽しいことやうれしいことが多かったが、時々とんでもなくストレスフルであった

←

連続放火事件を起こしたとみなされている少女とその家族に会うことになった

心理療法の専門書のどこを見ても、放火の再発防止法など書いてはいない

もっとも、そんなことを言えば心理療法は、なんだってそうなのである。だから一方、確かな治し方や、絶対に効くなんて方法もまた胡散臭いのだが

放火事件の記録を読むと、冤罪だと訴える親のことも登場する現場で発見されることの少ない事件であり、センセーショナルな事件でもあるために、一日も早い犯人逮捕をと焦る捜査が、冤罪を生んできた歴史がある

事件の事実は不問にしたまま、家族四人の定期的な面接を実施することになった

サラリーマンの父親とパート勤めの母親。小学校5年生の本人と、2年生の弟の四人である

結果的に一年半の間、月一度、一家で面接に来つづけた

しかし解決策は誰にも分からなかった。傍観者はいろいろ解釈したが、両親と担当者の私は、祈るようにできることだけ繰り返した

それが心のケアになったのかどうかは分からない

わかっていることで、よかったと思うのは、彼女の周りで二度と出火することがなかったことである

放火事件の関わる記憶では四人の子を思い出すことができる しかしどれも、何かが解明できたとはいえない

この間両親は、こんな質問を一度もしなかった。もし正面切ってそう聞かれたら私は、分かりませんと応えるしかなかっただろう

ここには面接の内容を描くのが目的ではない 木陰の物語では、家族の話を描いている

雪子の一家には大記録がある。それは一年半、十八回の面接に一度も、メンバーが欠けることも、急な用件で変更されることもなかったことである

大人が二人と学齢の子が二人普通は何かあるものである。それに一年以上続くのである インフルエンザも流行するし、不測の事故が生じたりするのも普通である。しかしそんなことは一度もなかった。約束の日に、かならず四人であらわれた

他にもたくさん家族面接をしていたし、直前になってからの日程変更依頼には苦慮していた。だから余計に際立って印象的だった

月に一度、かならず来てもらうからといって、何かを課してあったわけではない 近況を聞いて、四人で一枚の絵を描いてもらっていただけだ

「家族で何かしているところの絵」、これがテーマだ

一年半の面接を終了して三ヵ月ばかり経った頃、その後の様子を聞くため、フォローアップの電話をした

雪子本人が出て、母親が面接終了後一月もしないうちに、緊急入院したという。でも私がお母さん代わりで頑張っているから、大丈夫だよと雪子はいった

そして数日後、入院中の母親から手紙が来た

礼が述べられ、近況や病気のことを書いた後に、雪子のことが済んでからで本当に良かった。いまは安心して自分の体のことを考えられるとあった

家族は不思議なものだと思った
もう数ヶ月早く母親が体を壊していたら、面接は中断することになっていただろう

そうしたら雪子の問題が気がかりのまま、家族は次の課題と直面することになった
こんな事実に触れると、家族には、背負えない程の荷物が届くことはないのかもしれないと思う。しかし、いつも気楽にいればいいというものでもない
家族がいろいろ言われる昨今、どうしたら良いのか誰も教えてくれないのに、結果が悪かった時だけ責任が親に押しつけられると不満な人も多いかもしれない

しかしこの家族との出会いで私は、親の熱意は何かを変えるのだと思った。病気も事故も、緊急の用件も、面接を妨げなかった
両親は、効果があるならうかがうが、そうでないなら毎月休暇をとって行って、どうなるのですなどと聞きはしなかった
一生懸命は値打ちがあると思った。仕事一本の猛烈サラリーマンだった父の内面には、家族を放っておいた後悔があったかもしれない。結婚後、一度も夫婦で楽しむことなどなく、「家を買おう」「おまえもパートで助けろ」「休まず働いてローンを早く返そう」、そう生きてきた一家に、激変を求める課題が家族面接だった
父親はこれを、一度の例外もなくやりきった　この事実が家族を再生させたのだと思った
家族崩壊などと聞いた風なことをいう前に、何かあった時には一度、本気で家族の時間を生きてみればいいのだ。そんなことを思っていた

「木陰の物語」を
家族の構造理論で詳説する

❷

マンガ「みんな一緒に」

放火事件にまつわるケースを担当することになった時、特に策があったわけではない。だから当時、ケースを問わず実施していた「合同家族面接」と「家族描画法」をすることにした。結果的に年半、月に一度くらいのペースで家族に会い続けた。幸運なことに、放火の再発はなく、その結果には胸をなで下ろした。

しかし、そこから児童期の放火予防対策として、「合同家族面接」や「描画法」が有益だ等と言えたわけではなかった。

2019 年中国・蘇州で開かれた「表現性心理学会」に招かれて記念講演をしたとき、このケースを取り上げた。その時にも考えていたことだが、この家族が私にもたらしてくれた学びはとても大きいものだった。

今回はそれを振り返りながら家族療法のことを考えてみることにした。

放火

マンガでも描いているが、担当した当時、心理臨床経験 12 年目で様々なケースを数多く担当していた。

「放火」事案では、以前に公立小学校全焼事件、農家作業小屋の連続放火事件の経験があった。そして、公立中学校放火事件の精神鑑定について、保護者サイドからの異議申し立てを児相の嘱託医が受けている案件が身近なところにあった。

それまで、子どもの放火事案について、的を射た見解をあまり耳にしたことがなかった。後付け解釈で何とでも言えるのは、心理業界のアルアルだが、予防や対策について「なるほど！」と思わされた記憶は少ない。

軽度の知的障害を持つ児童（男児に偏っている）の火遊びからの不始末が多いことはどこかで読んだし、実感として納得の見解だった。

燃えてしまった被害物の大きさで、「放火」と「火遊び」に分けていると、警察関係者からだったかに聞かされたのは納得がいった。校舎が全焼していれば放火だし、貼ってあるポスターが燃えただけなら、火遊びというわけだ。

全家族面接へ

1983 年、中京大学で開催された第二回心理臨床学会で、福岡教育大学にいた亀口憲治さんは、不登校児の家族療法を福岡県の児童相談所で実施し、結果を出していると報告した。半信半疑ではあったが、興味を持って参加し、羨ましさも手伝って、「上手くいかなかったケースはないのか？」と質問もした。

すると、「初回面接の後、すぐ再登校し始めて終了になってしまったケースがある。それは家族療法としては失敗だ」と回答された。聞かされた私は、「なんだ、それは！」と腹立たしい気持ちで一緒に参加していた同僚達と憤慨していた。

その後、自分達の児童相談所でも全家族面接をビデオ記録と共に実施できる体制を整え、徐々にそこに誘導するようになった。

しかし低年齢の子も含まれる全家族面接は、一工夫が必要だった。会話中心の面接において、年少児童は置いてきぼりのお客様になってしまう。

そこを意識して、当時の全家族面接には頻回に「合同動的家族描画法（CKFD）」を含めていた。石川元著の小さな冊子「家族絵画療法（海鳴社刊）」がテキストだった。

非言語的素材での面接は、会話中心の面接と比較すると、表現能力の弱い子どもにも受け入れやすかった。加えて、知的障害のある家族員を含んだ面接場面でも有益な結果をもたらしてくれた。

パターン化したコミュニケーションスタイルも、得物を変える（言語から非言語に）と変化が起きる。そうなると展開も異なってくる。膠着したコミュニケーションパターンの問題は、非言語課題の提案で意外に簡単に変化した。現状改善のために指示や指導をしなくても、ツールの変更が相互作用の質を変化させた。

＊

ある中度知的障害のある入所施設在籍中の青年と、父親、兄との三人の合同家族面接でのことだ。

問題行動の頻発に手を焼いた父親の要望で、短期間の施設入所中だった。自宅復帰のための準備に合同家族面接を実施した。

面接の前半父親が一方的に本人の力のなさや、不注意なことをまくし立てた。兄からのサポーティヴな働きかけもなかった。

そう気付いたセラピストは後半、「合同動的家族描画法」を実施した。「よく話し合って、家族で何かしているところの絵を描いてください」という教示のものである。

前半まくし立てていた父親は、絵を描くとなるとトーンダウンした。兄は弟の描画意向を確認するように話しかけていた。そして本人のペースで画題が決まり、先ず彼からクレヨンを取って描き始めた。

合同動的家族描画法

（CKFD conjyoint　kinetic family drawing）

この方法を取り入れるのに積極的だったのは、合同家族面接に参加してくれている子ども達への配慮だった。大人同士が、問題要件を話しているところに、本人以外の子ども達の登場する余地はなかなかない。

配慮したつもりで、「学校はどうですか？」などと、社交のような質問をするのも馬鹿げている。限られた時間を有益に構成する義務が私達にはあるのだから、そこに工夫は必須だった。

絵を描くことに子ども達はあまり抵抗ないが、大人はおしなべてちょっと退く。会話で面接をすすめている時とは逆転の状態だった。家族が自覚できていたかどうかはともかく、公の場面ではあまり見せない特徴も数多く見られた。CKFD は非常に優れた家族の行動観察ツールだった。

一家で一枚の絵を描く所を想像してほしい。指示されたように一本ずつのクレパスを選び、あとは何を描くかを自分達で決めるための話し合いをする。

そして四角い画用紙を前に、どの方向から、どういう順番で作業してゆくかも自由決定である。家族独自の特徴が見られるのは当然である。

とはいうものの、実のところ、「家族で何かしているところの絵を描いてください」と教示されて描かれる内容の多くは食卓の絵である。家族で何かしているところと問われた家族は、

「一緒になることなんて、夕飯くらいかなぁ･･･」などと語り合って、そんな場面に落ち着く。これは数多く実施してみての経験から言えることである。

＊

雪子一家にCKFDを実施した段階で私には、まだそう多くの実施経験がなかった。だからそこで起きていたことが、とてもレアで特徴的だったことに気付いていなかった。

だからといってその特徴が、問題行動の原因であるなどと言いたいのではない。ただそのパターンは、意識するしないにかかわらず長年、この家族関係では繰り返されてきたものだということだ。

そんないくつかのパターン（土台）の上に、問題行動とされるものも乗っかっている。ならば、その土台に変化を提案してみるのは、なかなか賢明な策であろう。現状のどこかに変化が起きれば、それがなんであろうと構わない。改善は「変化」の中に含まれている。

雪子一家の合同家族面接も、前半の近況報告と後半の合同動的家族描画では、場の緊張感や気配りの案配は変化していた。

＊

家族に CKFD を実施する。何を描くかを自分達で決めて貰う。この段階で、日常の家族の行動に少し変化を強いていることになる。

絵を描くなど日常には行われない。とくに大人で日頃描いている人となど希である。だから得意な行動ではない。人が馴染みのないものや苦手なことを強制されたとき、いつもとは異なった行動を取る可能性が高いのは分かるだろう。場には子どももいて、そちらは絵を描くのがそう特殊な話ではない。ここで通常とは違った事態が起きる可能性は高い。

画題を決める主導権のところで変化が起き、着手するところでもそれは続く。父親が率先して絵を描くことは少ない。誰も手を出さない状況が起きたりすると、責任感で親が描き始める場合もあるが。

描かれていくものに確認を求めたり、口頭で工夫を助言したりする親は少なくない。手は出ないが口だけは出す親。両親のどちらにその傾向が強いかなど、いろいろ参考にはなる。

そんな中の気づきを後刻、明確化しながらフィードバックする。それによって家族行動の癖が自覚されたりする。

＊

雪子の一家は、父40歳、母37歳、雪子（小5、11歳）、長男（小1、7歳）の四人。描画法実施のため用意した円卓に向き合って席についてもらう。「家族で何かしているところの絵を描いてください」と指示し、後は自分達で話し合って描いてもらう。

家族療法の技法というわけではないが、児童相談所では使いやすい課題だ。

この家族の初回の描画はとても印象的なものだった。『近所の公園に遊びに行っているところ』という題材に決めたのだった。弟が早々に描き始めた公園の情景。幼さは残るが、楽しげに公園の遊具や自分の姿を描いて行く。

ところがそこに、向かいに座った父親が、天地真逆の位置取りには構わず描き始めた。そして息子の描いた絵の上に、自分の描きたいように遊具や家屋を重ねて描いた。

母親も娘も驚いたように、何も描かずにじっとしていた。そして大分経ってから、画用紙の大半が重ね書きで埋まった絵の隙間を見つけて、母娘は公園のコートラインや、ベンチを描き込んで終了になった。

ここではみんなで一枚の絵を調和的に描くという意図は感じられない。描きたい人が描き

たいように描く権利は維持されている。そして圧倒されている人は、隙間を縫うように参加だけしていた。

まだ使い始めたばかりのCKFDで、こんな珍しいことが起きていることにも鈍感だった。このレアさに気付くのは、大分時間が経ってからのことだった。

次回以後の家族面接でも毎回実施したCKFDにおいて、四人の描き方にやがて調和が生まれ始めた。

なにを描くかの話し合い、一本ずつ選ぶクレヨン色と画題の付合性、それぞれが描いたものへの適切な加筆など、回を追って上手な絵になっていったのである。

*

この事と、放火の再発予防が、どう繋がっているかと問われても明言は出来ない。因果関係など、解釈の域を出ないだろう。

ただ、家族間コミュニケーションの有り様は、調和的な描画行動の獲得と共に、スキルアップされていっただろうとは思う。初回のような母子の絶望感は急速に消えていった。四人居るところで、父親は他の三人の行動や意図を忖度できるように変化していった。

初期に妻に聞かされた父親のエピソードにこんな話があった。アウトドア派の父親は、暑い時期には毎日曜日、琵琶湖にウインドサーフィンに出かける。その時、男同士というので息子を連れて行くそうだ。それは母と娘は買い物に行きたいという希望を受けてのことらしい。

そうして出向いた湖岸で息子は、一日、父親がウインドサーフィンしているのを眺めているのだそうだ。およそ父子で出かけた情景とは似つかわしくない実態らしかった。おそらくそのようなことも変化していったのだと思う。

事実、来談する度に絵を描かなければならないので、その素材を作るために、前週の日曜日は四人であちこち出かけるようになったと語っていた。

そんな変化が生活のあちこちに生まれていたに違いないが、自覚的にしていることではないので、どのようなことがあったかは断片的にしか聞き切れていなかった。

これが家族に起きた変化といえば変化だった。そして担当者としては、再発がなかったことで胸をなで下ろしたのである。